

時評

「わかりやすさ」がいわれる。大学の授業もそうだ。最近はその大学とも、学生が授業を「評価」するシステムがあるが、評



佐藤 洋一郎

(総合地球環境学
研究所教授)

価項目の中にきまって「授業のわかりやすさ」という一項目がある。話は聞き取りやすいか、プリントやパソコンを駆使してビジュアルな話をしているかなど

「わかりやすさ」

について、学生たちが教授に点数をつけるのだ。

「わかりやすさ」はマスコミでも言われている。今度の選挙は争点が郵政民営化に絞られて対立点が「わかりやすい」とか、二大政党の政策の違いが「わかりにくい」とかいった具合だ。

面倒避ける言い訳に使うな

最近のテレビ番組も、視聴率という「評価」にさらされているようで、ここにもわかりやすさが登場する。いきおい、ものごとには「〇か×か」というじつに単純な二者択一の図式で片付けられてしまう。

しかし、わかりやすさとはなんだらうか。それに、わかりや

すければ何でもいいのだろうか。わかりやすさのためにこの本質が隠されてしまうようでは本末転倒である。講義の例で考えよう。講義で、同じことを話すならば、言語は明瞭で、ちゃんと整理された話のほうがさうでないものよりよいことは確

かだ。しかし話はいつもそう簡単とは限らない。講義で伝えなければならぬことの中には、聞く側が時間をかけて頭を整理し、じっくり考えることを必要とすることも多い。

とすることも多い。

「わかりやすい」例だけを「わかりやすく」描かれた絵で視覚的、感覚的に捕らえるのでなく、

言葉として聞き、文章として読み、想像し、理解するという砂をかむようなプロセスがあつてはじめて理解できるものもある。「読書自回意おのずから通ず」とはよく言ったものだと思

う。そういう意味で、むずかしい話を「わかりにくい」と片づけて敬遠するならば、それは知性の放棄である。娯楽番組を

る。娯楽番組を

こむずかしくせよとは言わないが、最近は大学院の学生でさえむずかしい本を読もうとしない。いまや知性の放棄は最高学府をも冒す深刻な病理になりつつある。

安易な「わかりやすさ」は安直につながる。いまはまんがブームで、三国志から料理法まで

がまんが本になっている。学生による「評価」で、安直なものをわかりやすいとしている事実はないか。報道番組では、本質的な指摘を避けてわかりやすいところだけを取り出して紹介してはいないか。手軽といえばそれまでだが、わかりやすさという発想が、苦勞をしないこと、言い訳に使われているとするならば、それは正すべきと思つ

執筆者略歴

さとう・よういちろう氏
京都大学大学院研究科修士課程修了、静岡大助教授を経て2004年4月から現職。植物遺伝学専攻。著書に「稲と日本史」（角川書店）「DNA考古学の手づめ」（丸善ライブラリー）など。